

「大腸ポリープ・ポリポース—臨床と病理」

東京大学教授・第1外科 武藤 徹一郎

浜松医科大学教授・病理学第1

喜 納 勇

わが畏友(と呼ぶことを許していただければ)武藤徹一郎教授が再び「大腸ポリープ・ポリポース」と題して立派な monograph を出版された。著者は14年前「大腸ポリープ—その病理と臨床」を出版されているが、今回はその改訂版でなくして、全く内容を一新された新版である。医学研究者にとって、臨床にせよ基礎にせよ、monograph を出版するというのはなかなかできないことであるが、著者は、これが3冊目の monograph である。これは通常の能力の者ができることではなくて、最も優秀な人のみがなせる業績である。

しかし、もとより著者の才能のみがこの立派な業績を成らしめたのではない。著者が序に何気なく記しているように、週末に書きためた努力がこの第3冊目の monograph となったのである。毎週末書くということは言うにやさしく、実行するに誠に困難な仕業である。このためまざる努力にも心から賞賛の言葉を送りたい。

大腸ポリープの知識は、確かにこの30年間に進歩している。武藤教授と共に東大病理学教室で、太田邦夫先生の指導のもとに大腸疾患の研究を始めたのはもう30年前のことになる。恥ずかしい話であるが、

筆者はこのとき胃や大腸のポリープを、腺腫(性ポリープ)や過形成性ポリープに分類する必要すらよく理解していなかった。極言すれば、ポリープはポリープそのもので十分だったのである。この辺の事情は現在では理解し難いかもしれない。

武藤教授は、太田先生の御指示でまず胃のポリープから研究に着手され、次いでロンドンの St Mark's Hospital の Dr. Morson のもとで大腸ポリープを含めあらゆる大腸疾患の研究を手掛けられたのである。そのころ、本邦でも胃だけでなく大腸腫瘍も研究しなければならないという気運がようやく持ち上がり、1974年、第1回大腸癌研究会が発足したのである。英国から帰国したばかりの武藤教授のこの研究会での活躍ぶりは目を見張るばかりであった。

そして、現在に至る長い研究の成果がこの名著「大腸ポリープ・ポリポース」に集約されている。主な項目を拾ってみると、「大腸ポリープ・ポリポース—概念と歴史的背景」では入門者にもよくわかるように解説が加えられている。「大腸ポリープの組織分類」では当然腺腫に力点が置かれている。腺腫の癌化については、著者の最も得意とする分野であるので詳細に説明が加えられている。Morson 博士の主張に関す

る説明も十分なされており、読者に adenoma-cancer sequence の必然性が脈々と伝わってくる。それだけでなく、de novo や progression という他の研究者の主張も無視することなく、批判を加えて紹介している。adenoma-cancer sequence 一辺倒では飽きたらない読者には批判を批判することもできよう。文献もくまなく挙げられており、更にこの問題を追究することも可能である。

本邦における腺腫に関する異型(atypia)と英米における異型(dysplasia)の使用法の違いもくどいほどよく説明されているので、入門者は是非熟読していただきたい所である。adenoma with severe dysplasia が本邦や米国では intramucosal carcinoma であることも率直に記述されている。「大腸ポリポースの組織分類」ではまれなポリポースも丁寧に記載されており、筆者にも大変参考になる所であった。更に診断・治療の項も実際に則して書かれており、実地臨床学にも大いに役立つものと期待される。

消化器を専門とする臨床医や、一般病理診断に携わる病理医は座右の書とすべきであろう。

● B5 頁 332 図 59 写真 322
原色図 94 1993 定価 14,935 円
(税込) 〒400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)